

5. 中断をはさんだ収録

飯 森 彬 彦

a. アンケートから

「話が予定された時間内に納まらないのではないか」という不安は、「講義を聴く学生の顔が見えなくて反応がわからない」という不安とともに、放送に出演する講師の抱く最大の悩みだといえよう。ひとり講師のみならず、ディレクターを初めとする番組収録に携わるスタッフ全員にとっても、きちんと放送予定時間内に講義を納めるということは、最も切実な関心事である。こうした関係者全員のかもす雰囲気が講師に作用して、収録前や収録中の講師にますます過度な緊張を強いる結果におちいりやすい。

今回実施したテレビ出演講師へのアンケート調査を見ても、「収録前、時間配分がうまくいくか不安を感じましたか」という質問に対して、「不安を感じた」という回答が43.1%、「少し感じた」という回答が37.1%で、合わせると約80%の講師が不安を感じていて、「時間」が収録前の不安の最大の起因となっている。「不安をあまり感じなかった」「感じなかった」は合わせても20%に達していない。

収録後の感想を聞いた「時間配分はうまくいきましたか」という質問に対しては、「うまくいったと思う」が40.3%、「やや思う」が43.8%と、約84%の出演講師が時間配分の「成功」を回答している。この結果を見るかぎり、「案じるより生むは易し」で、時間への懸念は無用であったかのように見える。しかし、アンケートの自由記述を丹念に読んでいくと、「総じて時間不足に悩まされた、内容が過大であった」「43分という時間内にきちんと納めなければならないのはきつかった、講義の内容よりも時間ばかりが気に掛かった」「時間内に納めなければならないという意識から固くなり、冗談もはさめず、ゆとりや面白みのない講義になった」「フロアからのゆっくり話せという合図にしたがって、ゆっくり話していたらかえって時間が足りなくなり、最後は駆け足で話を詰め込むようなことになった」「もっと話のテンポを早くという指示に従い話を急いだら、かえって時間が余ってしまい、間をもたせるのに苦勞した」「いつも最後は駆け足になり、十分話ができなかったという思いが残った」などという記述が多数目につく。こうした記述からは、時間への懸念が講義の内容にも大きく関わり、講義の内容を魅力のないものにしたたり、説明不足の分かりにくいものになっていることがうかがえる。したがって、時間に対する講師の不安を取り去ることは、講義の質を高めるうえでも重要な意味をもっているといえよう。

b. 制作現場における時間調整

では、実際の講義番組の制作現場では、どのように時間の調整が行なわれているのか、ここで簡単に振り返ってみよう。時間調整の基本となるのは当然のことながら、放送台本である。台本には、講師の話の内容や提示される映像資料の量などを基にして、番組を構成するブロックごとの時間が想定され、その総計としての番組が成り立っている。したがって、番組の時間調整がうまくいくかどうかは、基本的には台本の緻密さに負うところが大きい。この台本は講師とディレクターの協力により作成されるわけであるが、実際には講師の話の内容がどの程度

になるか、細かいところまではディレクターには把握できず、時間配分を講師に任せるしかないのが実情である。ところが、放送に不慣れな講師には、時間の把握が必ずしも十分でなく、ともすれば話に空白が生じる恐れから、話題を盛り込みすぎる傾向が生じる。このような実情から、適切な内容と時間配分を決めるために、リハーサルが欠かせなくなる。しかしリハーサルをして、その結果から内容を調整し時間配分を修正すれば、本番の収録がうまくいくかといえれば必ずしもそうはならないのである。リハーサルの際に時間を超過した場合は、話を短くしようという意識が働きすぎ、本番では時間を余らせてしまうことがよく生じる。またそれと丁度逆のような結果となることも多い。先のアンケートの自由記述にも見られるとおりである。こうした皮肉な結果を生む原因には、フロアディレクターからの不適切な指示もあろうが、最も大きいのは、慣れない講師に微妙な時間の感覚が把握できていないことではないかと思われる。

時間に対する不安から講師を解放する工夫はこれまでも制作の現場で、いろいろ試みられてきた。例えば、時間調整のため、時間の伸縮の可能なビデオを挿入する方法や、番組をいくつかの段に句切り、段落ごとにテロップやブリッジ音楽でつなぎ、講師に時間把握のゆとりを与える方法などである。また、省略あるいは付加の可能な写真や図表などを用意して、講義にある程度の自由度を与える方法なども実施されている。

ところで、講師が最も時間が気になるのは、番組も終末に近づいた時点である。事実、今回の出演中の講師の心拍数を計った調査でも、どの講師も番組終了直前に顕著な心拍の増加が認められた。この番組終末部における緊張のため、しばしば出演者は駆け足の説明におちいりやすく、肝心の話が抜け落ちてしまったり、抜け落ちないまでも、説明不足による無理解や誤解を招くような恐れを残し、後味の悪い作品となることもまれではない。そこで、この調査ではこの終末部における余分な緊張から出演講師を解放する方法として、「番組終了の前に1度収録を中断し、体制を建て直して最後の部分の収録に入る」方法を採用し、こうした方法がどのような影響をもたらすか、「初めから最後まで中断なしに通して収録をした」場合と対比して心拍数を調べ、その結果について考察することにした。

c. 実験対象番組

実験の対象とした番組は『母性の健康科学』の第14回、15回と『認知心理学』の11回と12回である。これらの番組はいずれも2本同日の収録が予定され、午前中に奇数回数の番組を収録し、午後に偶数回数を収録することになっていた。また、スタジオでは、両番組ともに午前と午後共通の講師が出演していて、この共通の講師について調査すれば、比較が容易であると考え、対象番組に選択したものである。そこで、奇数回数の番組は開始から終了までを通して収録し、偶数回数の番組は終了部分に入る前に1度収録を中断して休憩をとった後、最終部分を収録することにした。

実験の結果を紹介する前に、まずこれら4番組の内容がどのような構成になっているのか、次ページ以下の表で紹介する。

母性の健康科学

「14回 母性特有の病気」 担当講師 I 主任講師 ゲスト M 講師 N 講師 (ビデオ出演)			「15回 リプロダクティブヘルス～不妊と避妊」 担当講師 I 主任講師 ゲスト Y 講師		
1. タイトル		45"	1. タイトル		45"
2. 導入部	I 講師	1' 15" ----- 2' 00"	2. 導入部	I 講師	2' 50" ----- 3' 35"
3. 月経の異常 (図表 8 枚)	I 講師	7' 10" ----- 9' 10"	3. 避妊について (図表12枚) (実物 I U D)	Y 講師	21' 55" ----- 25' 30"
4. 性器感染症 (図表10枚)	M 講師	12' 50" ----- 22' 00"	4. 不妊について (図表 6 枚)	I 講師	12' 50" ----- 38' 20"
5. 子宮筋腫 (図表 3 枚)	I 講師	4' 35" ----- 26' 35"	[収録中断]		
6. 子宮内膜症 (N 講師ビデオ再生)		9' 15" ----- 35' 50"	5. 生殖促進技術と倫理 (図表 2 枚)	I 講師	2' 55" ----- 41' 15"
7. 卵巣腫瘍 (図表10枚)	I 講師	6' 15" ----- 42' 05"	6. シリーズのまとめ (図表 2 枚)	I 講師	2' 10" ----- 43' 25"
8. 講義のポイント	I 講師	45" ----- 42' 50"			
9. タイトル		1' 10" ----- 44' 00"	7. タイトル		35" ----- 44' 00"

この表で見るとおり、ゲスト講師は14回と15回では異なっている。したがって比較調査の対象は担当講師だけに絞られる。幸い、両回とも担当講師が終了部分の講義を担当している。

そこで15回の収録では、担当講師にどこで止めるのが望ましいか意向を聞き、終了7分前頃から予定されていた、生殖促進技術に関する説明に入る前に中断することにした。

なお、14回では I 担当講師が講義をしている時間は20分00秒で、その間に21枚の図表を使っている。15回では I 講師の講義時間は20分45秒で、使用した図表は10枚である。

講義をしている時間は15回の方が多少長いですが、使用している映像素材は15回の方が少なく、ビデオインサートもない。14回の方が出演者の出入りや、映像素材の切り替えが多く、やや気忙しいきらいがある反面、画面に顔を映されている時間は15回の方が長い。

認 知 心 理 学			
「11回 心の原風景」		「12回 心の構図を描く」	
担当講師 K主任講師		担当講師 K主任講師	
担当講師 H主任講師		担当講師 H主任講師	
1. タイトル		45"	45"
2. 導入部	K講師	15" 1' 00"	20" 1' 05"
3. 感情について (図表1枚)	K講師	7' 05" 8' 05"	3' 30" 4' 35"
4. 感情分析 (図表4枚)	H講師	9' 35" 17' 40"	8' 05" 12' 40"
5. 想起と原光景 (図表5枚と写真1枚) (B G 音楽30秒程度)	K講師	17' 35" 35' 15"	5' 05" 17' 45"
6. 原風景について (図2枚)	H講師	7' 15" 42' 30"	5' 20" 23' 05"
7. あいさつ	K講師	55" 43' 25"	[収録中断]
			7. フロイドの心の分析 (図表3枚) 8' 15" 31' 20"
			8. ユングの分析と あいさつ (図表4枚) 12' 05" 43' 25"
8. タイトル		35" 44' 00"	9. タイトル 35" 44' 00"

この番組は毎回2人の主任講師が担当し、1つの番組の中で交互に話をしていく形式をとっている。そこで、実験では2人の講師のデータをとるため、番組の中程で収録を中断し、中断後にも2人の話す部分を1か所ずつ確保した。

K講師は11回では3度登場し、合計25分50秒講義をしており、12回でも3度で、講義時間の合計は21分00秒である。使用した図表は11回では7枚、12回では9枚である。

H講師は11回では2度登場し、16分50秒講義を行ない、12回では中断をはさんで3度にわたり、21分40秒の講義をしている。使用した図表は、11回では6枚、12回では9枚である。12回では、他に30秒程度のビデオインサートが2回ある。このビデオインサートは『母性の健康科学・14回』のビデオインサートとは異なり、映像だけがインサートされるもので、その映像に合わせて講師は説明を加えなければならず、講師の負担が軽減されることはない。むしろ映像時間内に説明を納めることが要請されるので、図表などよりも負担は重くなるものと思われる。

d. 実験の結果について

先に紹介しているとおり、収録中の講師の心拍数の変化は『母性の健康科学』と『認知心理学』では多少異なっている。そこで、こうした実験の結果を、これまで述べてきた番組の内容と照合せながら検討し、若干の考察を加えることにする。

まず『母性の健康科学』の結果を見てみよう。最初に心拍数の測定で認められた結果を要約しておきたい。

* 基本的な心拍の変化のパターンは、途中の中断をはさんでも変化しない。

番組の収録に入ったばかりでは心拍数は増加する。その後やや減少し、番組終了を前に著しい増加が認められる。収録中であっても、他の講師が話を受け持って、自らは待機している時は心拍数は少ない。また、図表が映っているときは顔が映されているときよりも、心拍数は少ない。こうした基本的なパターンは、通して収録しても、途中中断をはさんでも変わらない。

ただし、番組最終部分における心拍数は、中断をはさんだときの方が、通して収録した時よりも少ない。

* 番組45分全体を通してのI講師の心拍数は、中断をはさんで収録した場合の方が、通して収録した場合よりも少ない

10秒間の平均心拍数はすでに紹介したように、中断をはさんだ場合の100.1に対して、中断なしの場合は102.5と95%レベルの信頼率で有意差が認められている。

以上述べたように、この番組の心拍数の測定では、中断をはさんだ収録の方が、全体を通して収録した場合よりも、心拍が少なくなるという傾向が認められる。

しかし、この結果からただちに、「中断をはさんだ収録の方が、通しての収録よりも、講師の緊張を和らげる」と普遍化した結論づけをすることはできない。というのは、講師の緊張は収録の形態ばかりでなく、番組の内容とも深く関わっていると考えられるからである。

そこで、以下内容に関わるいくつかの側面をとりあげて検討してみたい。

① I講師が講義した時間は、中断をはさんだ15回の方が14回よりも40秒ほど長い

当然のことであるが、講義をしている時間に比べ、他の講師に講義を任せて、待機している

時間の方が心拍数は少ない。この待機時間が短く、自分の担当している時間が長い15回の方が心拍数が少ないのであるから、この結果をは中断による緊張緩和の効果を強調するものといえよう。

②講義の中でI教授が使用した図表は15回の方が14回よりも少ない

使用した図表は14回では21枚であるが、15回では10枚にすぎない。使用枚数が多いことは、一つ一つの説明が短時間でなされ、番組の進行がやや慌ただしいのではないかと推測される。このような慌ただしさの少ない15回の方が、講師の心拍数が少ないのは当然の結果とも思われる。つまりこの側面からは、14回の方が心拍数が少なくなるのは、中断して収録したことによる効果だけとは言えないのではないかという疑問が生じることになる。

③顔が映されている時間は15回の方が長い

15回は図表の使用が少ないのに、講義をしている時間は長いのであるから、当然カメラに向かって（テレビに顔を映されながら）話している時間は長い。実験のデータを見ると、カメラに顔を見せながら話すとき、I講師の心拍数は増加している。このような心拍数の増加する時間が多いにもかかわらず、中断をはさんで収録する方法を採用した15回の方が、平均心拍数の少ないことは、その効果を強調しているといえよう。

④映像の切り替えや講義内容の切り替えは15回の方が少ない

15回にはビデオインサートがなく、スタジオの映像に終始する。また導入部の後1度ゲスト講師が登場するだけで、講師の交代は1度だけ、講義内容もほぼ2項目だけである。それに比べ14回ではゲスト出演者のほかに、ビデオ出演の講師がいて、講義の内容も4項目に区分される。このように切り替えの多いことは、講師の負担を重くすると思われる、切り替えの少ない15回の方が平均心拍数が少ないのはその表われで、中断をはさんだ収録の効果ばかりとは言えないのではないかという疑問が提示されることになる。

以上、中断をはさんだ収録による効果を補強するような事実と、逆にその効果に疑問を起こさせるような事実を列挙した。こうした個々の指摘に対して、どのような重みをつければよいのか判断するデータはない。ただ常識的には①は最も大きい意味を持つと思われる、③とともに今回の心拍数の測定結果によっても裏付けられる。それに対して、②と④は経験的な判断にすぎない。

また、両番組収録直後の簡単なアンケートでは、I講師は「内容としては15回の方が満足がいったが、そのことは中断したことよりも、内容の量が適切であったことによることが多い」「中断する方が楽であり、もう1度収録する場合はその方で行ないたい」と答えている。

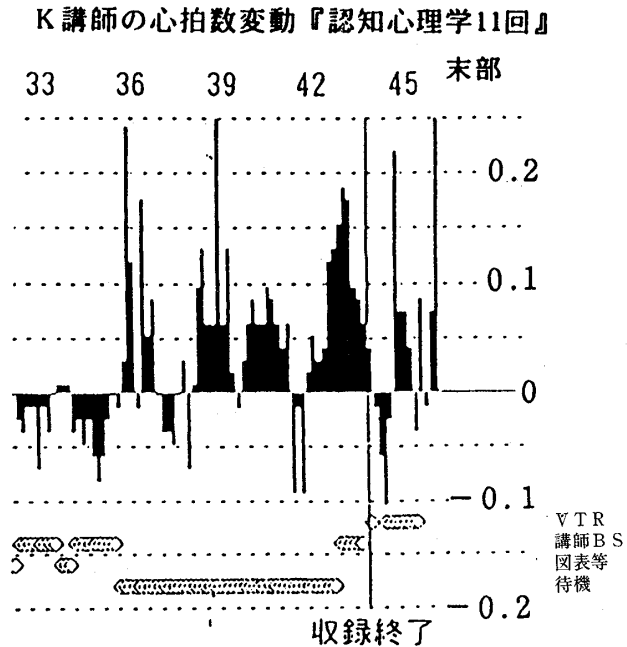
この結果から『母性の健康科学』では、中断をはさんだ収録方法は、講義の質を高める点では定かとは言えないものの、講師の緊張を和らげる点においては、効果があったと判断してよいのではないかとと思われる。

次に『認知心理学』の結果について検討してみよう。まず心拍数の測定では次のような結果が認められる。

*すでに述べたように、出演講師の心拍数は番組の最初の部分で増加したあと、番組が進行するにつれ減少して落ち着き、最終部分に入るとまた著しく増加するのが一般的傾向である。と

ところが、この番組では、通して収録した11回ではその傾向どおりであるが、中断をはさんで収録した12回ではそのような傾向は見られず、終始心拍数は低い数値に保たれている。どちらの番組も開始部、集結部ともにK講師が担当しているのに、なぜかこのような異なった結果が認められる。

* H講師の場合、他の多くの講師どうよう、最も心拍数が増加するのは、顔を画面に映されながら話をする時であり、次いで図表やビデオを見せて説明だけを加えている時であり、待機しているときが最も心拍数は少なくなる。ところが、K講師の場合には自分が講義をしているときよりも、相方のH講師が講義をしているときの方が心拍数は増加している。特に、通して収録した11回では、終了部が近い、36分から42分頃までのH講師が講義している場面で、K講師の心拍数は顕著に増加している。(左図)



*番組収録中の1分間の平均心拍数はK講師の場合は、途中中断をはさんで収録した12回は、87.3で、通して収録した11回の91.7よりも4.4も少なく信頼率99%レベルでの有意差が認められる。しかし、H講師の場合は、中断をはさんだ12回は85.4で、通して収録した11回の84.8よりも0.6多い。ただしこの差はわずかであり、有意とは認められない。

以上のように、心拍数の測定ではまちまちな傾向が見られるのであるが、どのような解釈をすべきなのであろうか。番組の内容と照らし合わせて検討してみよう。

① K講師が実際に講義をしている時間は、11回は25分、12回は20分45秒である。ただしK講師の場合、講義している時と待機している時との間には、ほとんど心拍数の変化は見られず、ときにはむしろ待機している時の方が心拍数が増加する傾向が見られる。したがってあまり講義をしている時間には考慮をばらう必要はないと思われ、中断して収録した場合の心拍数の減少は、そのまま中断をはさんだ収録の効果として受け止めてよいものと思われる。

一方、H講師の場合、わずかとはいえ中断をはさんで収録した12回の方が、通して収録した11回よりも心拍数は増えているのであるが、H講師が講義を担当した時間を見ると、11回は16分50秒であるのに対して、12回は21分40秒で、5分近く長い。心拍数を見ると、H講師の場合はK講師とは異なり、待機している時よりも講義をしている時の方が著しくは増加している。つまり12回における心拍数の増加は、5分にも及ぶ講義時間の増加によるものであり、中断をはさんで収録したこととは関係がないものと思われる。むしろ講義時間が5分近くも増加したのに、0.6回程度の心拍数の増加にとどまったのは、途中で休止をはさんで収録をしたためであるという解釈が成り立つかもしれない。

② K講師が使用した図表は、11回が25分間に8枚、12回は21分45秒間に10枚である。テレビ

画面に顔が映されている時間は11回の方がかなり多いことになるが、K講師の場合、あまりこうした要素には左右されることがないのでこの点は考慮する必要がないものと思われる。また、慌ただしさという側面から見ると、12回はより短い時間の中で、より多い図表を用いているのであるから、11回よりはやや慌ただしいかとも思われるが、全体的には、11回、12回ともにゆったりと進行していて、この面も考慮する必要はないものと思われる。

③H講師の場合は、11回では16分50秒の間に6枚の図表を使用したにすぎないのに対して、12回では21分40秒の間に9枚の図表と40秒前後のビデオ映像を2度用いている。この映像の切り替えが強要する緊張が想定される反面、その分だけ顔をテレビ画面に映される緊張が軽減されることも想定される。H講師の心拍数は既に述べたように、こうした状況に応じて、かなり異なっている。しかし、さしひきどのていどととらえればよいのか、今回のデータからは判断できない。

④K講師が待機中にかえって心拍数が増加するのは、その間に講義をしているH講師と師弟関係にあることに原因があるのではないかと思われる。自分の講義よりも、教え子の講義を見守っている時の方が緊張するのではないかと考えられよう。また、とりわけ11回終末部の待機中に心拍数が増加したのは、この最終部分を受け持つことになっているのに、なかなかH講師の話が終らず、自分の持ち時間が短くなってしまっているのではないか、という不安によるのではないかと考えられる。

収録直後のアンケートを見ると、K講師、H講師ともに「中断をはさんで収録した番組の方が、満足のいく内容であり楽でもあった。今後できるならば、中断をはさんで収録したい」と回答している。先の実験結果に基づいた検討と合わせて判断するとき、『認知心理学』においては、中断をはさんだ収録方法は、出演講師の負担を軽くしたうえ、講義内容をも充実させたと言えよう。

e. 時間による緊張を解消するために

『母性の健康科学』『認知心理学』それぞれ2番組づつを取り上げて、比較対照した実験では、共に中断をはさんで収録をする方法を採用した方が、出演講師の負担が軽減されるという結果が認められた。実験終了後の座談会でH講師から、「ただ中断した後の時間調整が楽になったばかりではなく、途中休めるのだと思うと、初めから気が楽であった」という発言があったように、中断をはさむことの効果は、番組収録時全般に及んでいることがうかがえた。

ここで、この実験に協力した講師の方々について、ふれておきたい。『母性の健康科学』を担当したI講師は、テレビの出演はこの講座が初めてである。『母性の健康科学』では主任講師として、毎回講座の最初と最後に顔を出し、講座全体の監修にあたりながら、講座を時間どおりに収める調整役をつとめている。『母性の健康科学』は5人の担当講師が交代で講師をつとめている番組であり、担当講師の講義時間は37分程度をめぐりにしているが、そのつどかなり差がある。つまり残った時間をうまく埋める必要があるわけである。I講師は初めての経験にも関わらず、この役割を上手にこなしてきた。また、この実験は14回と15回という最終収録に近いところで実施された。いわば、時間の調整にかなり手慣れた講師を対象として、調査を実施したわけである。

また『認知心理学』を担当した2人の講師は、テレビ出演の経験の豊富な講師である。1分間における、平均心拍数をみても2人とも100をわっており、あまりテレビに出演しても動じない講師であることがわかる。つまり今回調査の対象となった講師は全員、時間による緊張にはさほど左右されないタイプの講師ばかりであったのではないかと思われるのである。

したがって、もし放送による講義が初めてというような講師や、緊張しやすいタイプの講師の場合には、中断をはさんで収録した場合と、初めから最後まで通して収録した場合では、もっと大きい差が生じるのではないかと推測されよう。

ところで、時間による緊張から講師を開放したとしても、それが講義内容の向上に結びつかないかぎり、それほど意味をもたない。例えば、中断をはさんで収録することにより、番組を時間内に納めることが容易になったとしても、講義全体が適切な時間配分にはなっていないような場合も生じるわけである。中断を予定していた時間が大幅にずれて、内容と比べて中断後の時間がきわめて短くなってしまったり、また逆に、時間をあまりにも残しすぎてあましまったりする場合も生じよう。特に、収録を中断するのだからといった安易な考えが、講師や制作担当者に生じるとき、こうした危険は増加することが予測される。どのような収録方法を採用するにしろ、講義内容全体を考慮した適切な時間の配分は欠かすことはできない。こうした配慮があってはじめて、中断をはさんで収録する方法は、講師の緊張を幾分やわらげ、内容の改善にもその反映が表われるといえよう。

これまで、中断をはさんで収録する方法の有効性について述べてきた。しかし、この方法が時間の制約がもたらす講師の緊張を取り払う上で、根本的な意味をもつかといえば、疑問がある。先に述べたように、中断するまでにあまりに時間を使い過ぎ、残った時間が少なくなってしまった場合など、終末部の収録時かえってプレッシャーが強まることも考えられよう。45分という長い時間の中で時間調整するよりも、残された5分、10分といった短い時間の中で時間を調整することの方がはるかに難しい、と思われるからである。

講義内容全体が適切に時間配分され、しかも、講師にはあまり時間による緊張を強くない、よい方法はないものだろうか。

実験終了後に実施された、実験に協力した講師の座談会では、番組時間のもたらす講師の緊張をときほぐす方法として、次のような3つの方法が提言されている。

- ①講義を幾つかのブロックにわけ、ブロックごとに収録する
- ②時間に束縛されず納得のいくまで講義をし、編集で時間を調整する
- ③放送時間をきちんときめないで、数分程度の幅をもたせる

こうした方法を単に1つだけ採用するのではなく、組み合わせで採用すれば、時間の問題はほぼ解決するのかもしれない。しかし、こうした方法は、実施上は、困難な問題を抱えている。

まず、リソース確保の問題である。ブロックごとに分けて収録する場合には、収録時それだけ余分な時間がかかるし、後で編集することになれば、編集機、編集室も現在のままでは間に合わないことになるであろう。

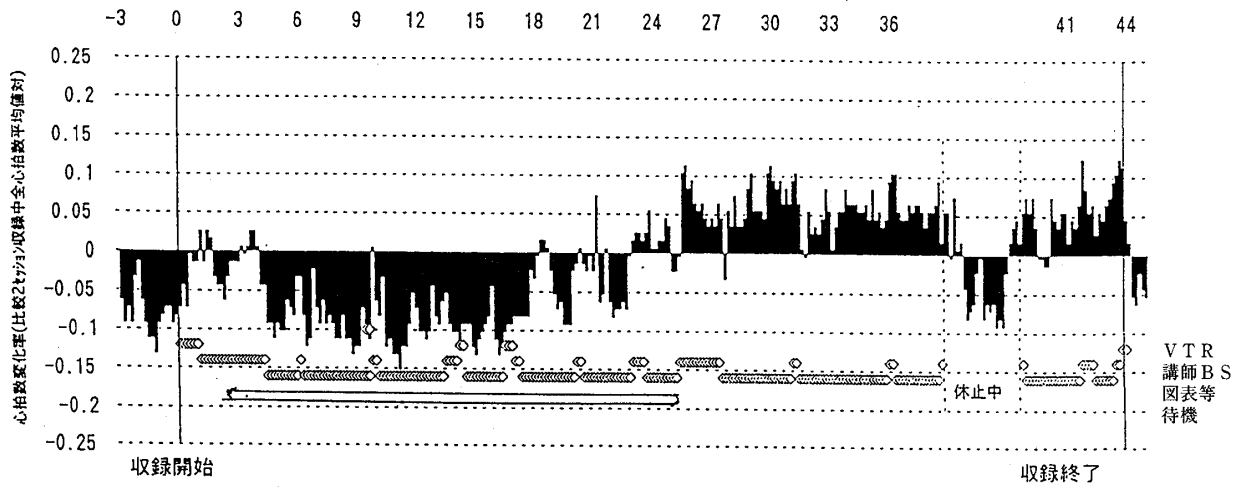
また、手間の問題も生じよう。制作者はもとより技術スタッフの立ち会う時間も増加することになるであろう。

さらに、編集点を誰が決めるかという問題も出てこよう。講師が編集時いつも立ち会うゆと

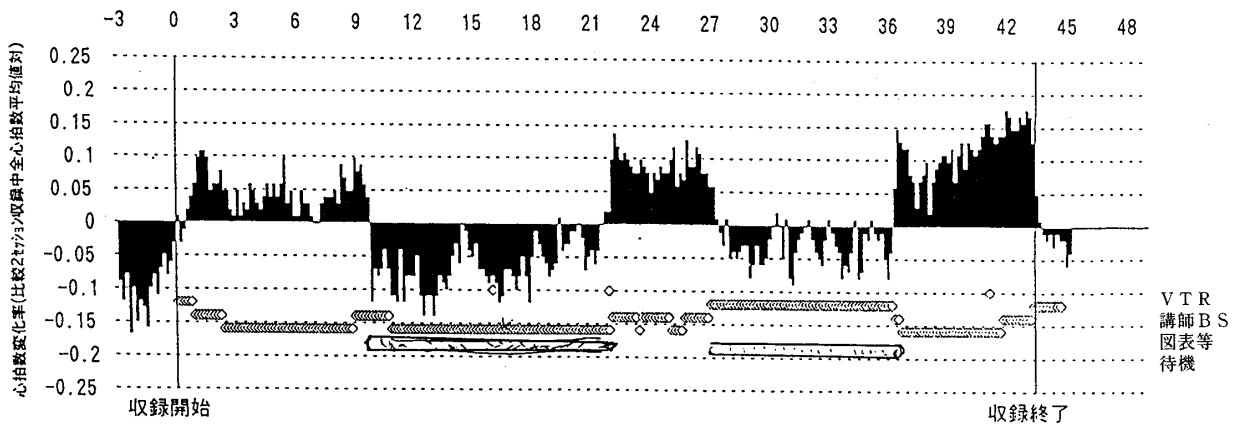
りがあるか、どこまで制作者が決定できるか、といった点で新たな摩擦が生じる恐れもある。

ただ、先の3件の提案のうち、③の放送の時間に幅を持たせる方法だけは、比較的、実現が容易ではないかと思われる。例えば、5分間のフィラーを用意しておけば、放送時間に45分から50分というような幅を持たせることは簡単であろう。つまり、いくつか5分程度のフィラーを用意すれば、新たな労力やリソースは必要がなく、また内容をめぐって講師を煩わせることもないわけである。外国の放送などを見ると、こうした幅をもった放送編成をしているケースは少なくない。振り返ってみると、現在の放送大学の番組でも講義番組は44分で終らせ、後に1分間のフィラーを流している。このフィラーの時間を流用すれば、現在の番組編成のままでも、1分間の幅を設定することは可能なのではないだろうか。もちろん、テレビに向かって講義を聞いている学生の生活時間を考慮し、番組と番組の間に、視聴の準備の時間を作る必要があるだろう。しかしその準備は、テーマ音楽が流されている時間で間に合うケースも少なくなく、また2～3分とっても足りないケースもないとはいえないであろう。フィラーの1分間という時間は、科学的な根拠というよりも、なんとなくこの程度の時間あればよいだろうといった漠然とした判断によるものとはいえないだろうか。であれば、もっとこの時間を自由に活用してはどうであろう。「放送は、定時に始まり、定時に終るもの」という、固定した考えに自縛されてしまっていないか、振り返って検討してみる必要があるように思われる。

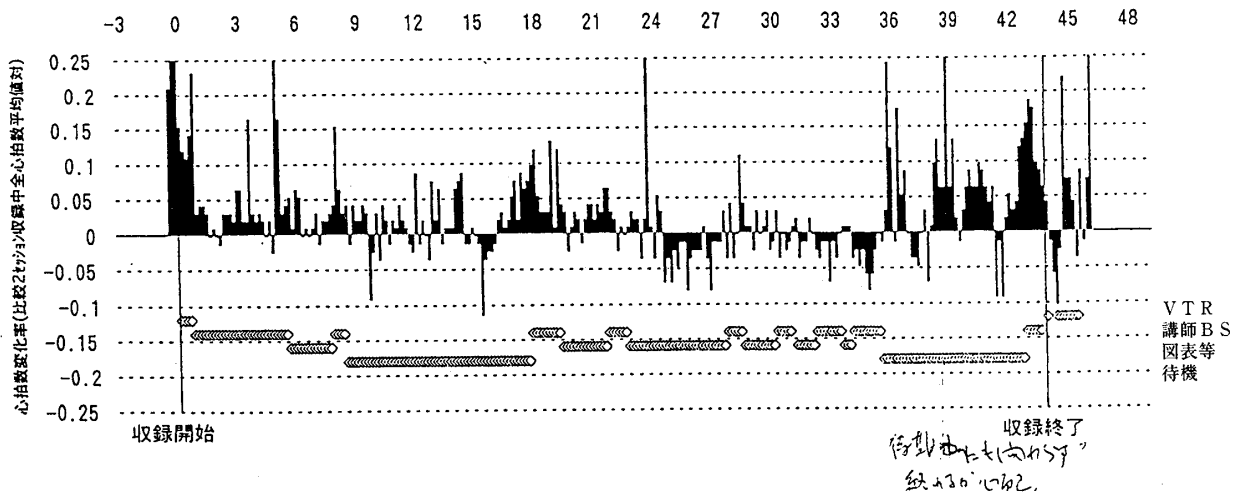
通 して の 収 録 I 講 師



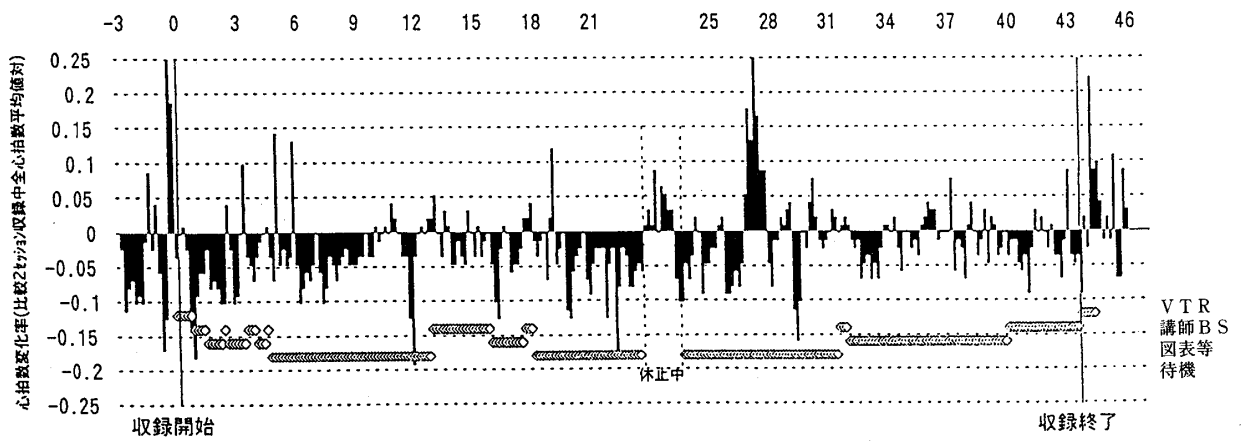
中 断 を は さ ん だ 収 録 I 講 師



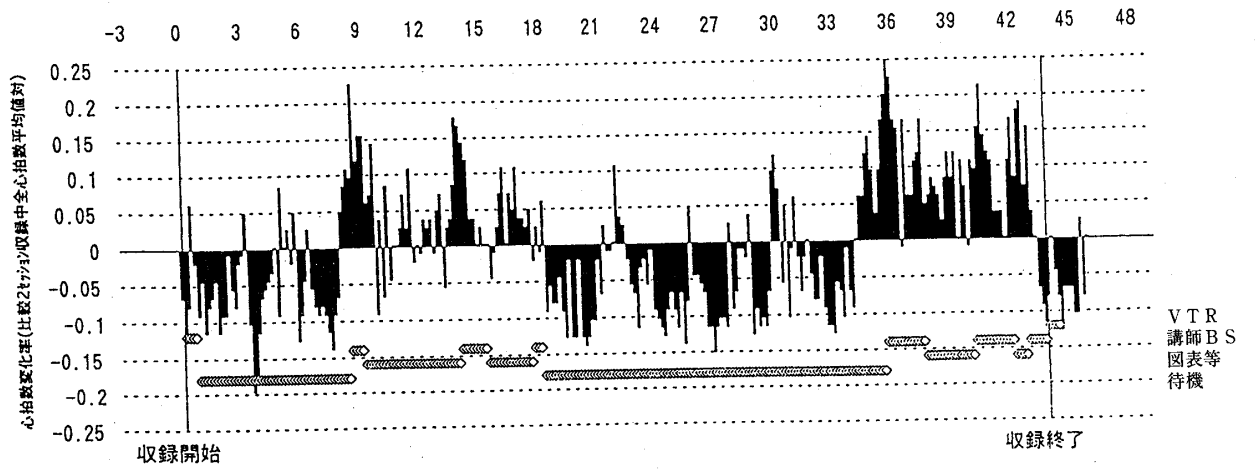
通しての収録 K 講師



中断をはさんだ収録 K 講師



通しての収録 H講師



中断をはさんだ収録 H講師

